

はじめに

日中文化振興事業団の代表理事の胡金定先生（甲南大学教授）からお声かけをいただき、四年間にわたり、梅田第二ビル生涯教育センターで「三国志講座」をおこなってまいりました。途中、コロナ禍のため時に休講することもありましたが、三年間にわたる正史『三国志』の講座を無事終えることができました。そしてその後は、引き続き『三国志演義』をということで、現在まで「三国志演義名場面」と題して講座を続けてきました。

三国志関連の書物は、ネットで『三国志』と検索しただけでも膨大な数にのぼります。『三国志』は一つではなく、書く人の数だけ、それぞれの思いを託した『三国志』がある、といった状況を呈しています。これからも表現の形を変えながら、語り書き継がれていくことでしょう。それは、時代や社会を超えて、読む人の心にとどまる永遠なるものが、『三国志』にはあるからだと思います。

私が『三国志演義』を初めて手にしたのは高校生の時で、それは平凡社からでていた「完訳四大奇書」シリーズの『三国志演義』（立間祥介氏訳）でした。文体は文語調で初めは少しとっつきにくいのですが、読み進めるとその言い回しの独特のリズムに魅せられ、

時を経つのも忘れて読みふけりました。その後、中国の歴史を学ぶきっかけとなった、若き日の思い出に残る貴重な一書になっています。

いま私の手元にある『三国志演義』の翻訳本は、この立間祥介氏訳（平凡社）と井波律子氏訳（講談社学術文庫）、小川環樹・武部利男氏編訳（岩波少年文庫）の三冊です。

全訳本はかなり分量が多く、読み通すには少々時間を要します。また、抄訳本もそれはそれで面白く読めますが、『三国志演義』の魅力は、なんといっても登場人物が名場面で発する言葉の妙味みょうみにあると思いますので、その細部が簡略化されてしまうと、どこか物足りなく感じてしまいます。

そこで、講座では、『三国志演義』の代表的な名場面を取り上げ、そこでは登場人物のやりとりを本文の訳で紹介し、そしてその間は、解説やあらすじでつないでいくようにしました。時間がかかり過ぎないように配慮し、それでいて『三国志演義』全体を網羅もうらできるような心がけたつもりです。

私も、あまたある『三国志』という大河の一滴いっぴくに加わり、その魅力と面白さを自分なりにお伝えできればと思います。

一 『三国志演義』の成立

歴史書である陳寿ちんじゆうの『三国志』（正史）は、3世紀末、西晋せいしんの時代にできあがりです。そして、一四世紀中ごろの明みんの時代に、羅貫中らかんちゆう（生没年せいぼつねんなど詳細は不詳ふせよう）が長編小説『三国志演義』を書いたといわれています。はじめは手書きによってつたえられますが、その後、木版印刷もくはんで出版されるようになり、現在、私たちが手にしている『三国志演義』（毛宗崗本）は、十七世紀後半の清しんの時代に出版されたものです。

『三国志』の成立から『三国志演義』が書かれるまでの間、いわゆる「三国志もの」の人氣はたいへんなもので、民衆の間に広く支持をうけていました。

唐の時代の有名な詩人の子どもが、来客が帰ったあと、さっきのおじさんのひげづらは張飛ちやうけいのようだった、また鄧艾とうがいみたいにももっていたよ、と言って笑った（李商隱りしやういん「驕児詩」）とあります。

また、北宋そしよくの蘇軾そしやくはそのエッセイで、子どもたちがやかましくて家で持てあますと、小遣いを渡して『三国志』がたりを聴きにかせる。彼らは劉備りゅうびが負ける場面では泣き出す者もいて、また反対に曹操そうそうが敗れるところでは喝采かつさいする、と記しるしています。

水滸伝すいこでんでは、黒旋風こくせんふうの李逵りきが宋の都開封かいほうの盛り場の寄席よせに入り、関羽かんぶが左の肘ひじに当たった

矢の毒を名臣華佗が骨を削って取り除く場面で、荒療治にもかかわらず関羽は客と碁を打ちながら平然としている姿に、李達はおもわず大声で「これぞ快男児」と大騒ぎします（第百十回）。

このように、「三国志もの」は民衆の間に根を下ろし、民衆の人氣に支えられてきました。そしてその役回りは、劉備は善人でいわゆるベビーフェイス、一方、曹操は悪人でヒール役という形で定着していました。そして、明代になって書かれた長編小説『三国志演義』は、このような紋切り型の役回りをそのまま受け継ぎながら、曹操の颯爽とした英雄ぶりも随所に書き入れています。つまり、人物像に陰影ある彫琢がほどこされ、単なる勧善懲悪ものにとどまらない『三国志演義』が誕生したのです。そこも『三国志演義』の魅力の一つになっています。

2 日本での『三国志』

私たち世代の日本人の多くがまず目にしたのは、吉川英治の『三国志』でした。

その冒頭は、一年有余働いて貯めたお金で、母親のために茶を買い求める親孝行な劉備が登場します。

書き出しは、以下の通りです。

「一人の旅人があった。

腰に、一剣を佩(は)いているほか、身なりはいたって見すばらしいが、眉(まゆ)は秀(ひ)いで、唇(くち)は紅(あか)く、とりわけ聡明(そうめい)そうな眸(ひとみ)や、豊(ゆたか)な頬(ほお)をしていて、つねにどこかに微笑をふくみ、総じて賤(いやし)げな容子(ようす)がなかった。年の頃は二十四、五。

草むらの中に、ぼつねんと坐つて、膝をかかえこんでいた。悠久ゆうきゅうと水は行く―

微風は爽さわやかに鬢(びん)をなでる。」

その後、黄巾軍に追われた劉備の危難を張飛が救い、張飛が兄事(けいじ)した関羽を劉備に紹介し、三人が義兄弟(ちぎ)の契りを結ぶという設定です。

これが、私たち世代の多くが、まず目にした劉備像でした。それはその後の作品にも受け継がれていきます。

横山光輝氏の漫画『三国志』も、冒頭はこの場面からはじまります。

一九八二年〜一九八四年にNHKで放送された人形劇『三国志』は、冒頭は原作の『三国

『志演義』に近いですが、劉備の危難を救う関羽、劉備と太平道の張角との対話、劉備と曹操の出会いなど、『三国志演義』をベースにしながらも、いろいろ新しい設定がされています。『三国志演義』全編を映像化したテレビドラマは二つあります。一つは一九九四年完成の『三国志演義』。これは『三国志演義』を初めて完全映像化したものです。ほぼ原作通りに描かかれています。

もう一つは二〇一〇年完成の『三国志 Three Kingdoms』。こちらは、現代的な解釈を盛り込んで、原作をベースにしながらも随所ずいしょにかなりの改変が見られます。このように、表現する形をさまざまに変えながら、現代に受け継がれています。

いずれもユーチューブやDVDで見ることができますので、ぜひご視聴ください。

3 三国時代までの王朝の移り変わり

中国の王朝は約四千年前の夏王朝かにはじまり殷・周いん しゅうとつづき、周は前半が西周せいしゅうと東周とうしゅうにわかれ、後半の東周はそれぞれ春秋時代と戦国時代せんごくにわかれます。

夏・殷・周は黄河流域を中心こに発展しますが、春秋時代にはその舞台は長江流域ちやうきやうりゅうに広がります。「春秋の五霸ごは」には江南の呉王夫差ごこ ふさと越王句踐えつ ごうせんが含まれています。

戦国時代には小国は大国の支配下にはいり、いわゆる「戦国の七雄」の強国が割拠する時代にはいりません。そして、この分裂の時代をはじめて統一し、その領域を大きく拡大したのが秦の始皇帝です。紀元前二二一年のことです。

秦は法家の学説を採用し、全国を三十六の郡に分け、中央から官吏を派遣して直接統治をおこない（郡県制）、厳格な法を適用して統治をおこないました。始皇帝は、万里の長城や阿房宮の大土木工事、また兵馬備の発見などで有名です。しかし、この秦よる統一もわずか十五年で崩壊します。

秦末の混乱の中から勝ち残ってきたのが、漢の劉邦と楚の項羽です。はじめは項羽が優勢でしたが、西に追いやられた劉邦が反撃にでて、しだいに項羽を圧迫していきます。そして最後は「垓下の戦い」で項羽を破り、再び中国を統一します。

漢の劉邦は、秦の苛酷な法治の失敗をみて緩やかな統治をこころがけます。「法三章」の故事が有名ですが、もちろん三つの法だけで統治はできませんので、あくまでのそのような考えにもとづいてという意味です。この無理をしないというやりかたは功を奏し、漢王朝は二百年間もつづくことになります（前漢）。そして、七代目の武帝の時にはモンゴル高原の匈奴を圧倒し、張騫を中央アジア（西域）に派遣してシルクロードをひらくなど、漢の

全盛期を迎えます。

しかしその後しだいに衰え、宦官かんがんや外戚がいせきの抗争がはじまります。そして、最後は外戚の王莽わうちゆうが帝位を奪い、新しんという王朝をつくります。しかし、この新ははじめから政治が混乱して、各地に反乱がひろがりしました。その中から勝ち上がってきたのが、漢の流れをくむ南陽なんようの豪族出身の劉秀りゅうしゅう（光武帝こうぶてい）でした。そして劉秀が漢王朝をふたたびつくりあげます。前の漢と区別してこちらは後漢ごかんといえます。

この後漢も、寛大な統治かんたいをこころがけて二百年の長きにわたって続くことになります。

そしてこの後漢も時代がさがるとともに、しだいに皇帝の即位年齢が若くなり、やがて幼少で皇帝になるケースが増えてきます。そうなれば、幼少の皇帝にかわって誰が政治を執とり行うかという、皇帝の母（皇太后こうたいこう）がおこないます。しかし、女手おんなで一つで政治を執り行うのは大変なことですので、誰を頼りに相談するかというと、身近な自分の父や兄弟などの外戚になります。

こうして、外戚が政治の実権を握る道がひらかれます。外戚は皇太后の一族というだけで政治の実権を握ります。かれらは、高い教養を身につけて周りまわから尊敬されたり、大きな功績をあげて出世をしたというわけではありません。

いっぽう幼少の皇帝も次第に大きくなってくると、外戚がおもうがままに権力をふるっている現状をみて面白くありません。たとえば、後漢の質帝しつていという皇帝は、外戚の梁冀りやうきのことを「跋扈將軍ぱつこ（おもいのままにふるまう將軍）」といったため、梁冀によって毒殺されてしまいます。外戚が、皇帝でも自分に都合が悪ければ殺してしまうという、大変な事態ですね。

皇帝には自分の身の回りの世話をする宦官がいました。皇帝が外戚をなんとか始末しまつせねばと思うようになると、朝廷ちやうていの役人に相談すれば事が発覚はつかくする恐れがありますので、どうしても身近みじかな宦官たちの協力を仰ぎます。

宦官の存在は、日本とヨーロッパを除いて、広くアジア全体の専制国家せんせいこっかに広まっています。ですから日本の歴史は宦官とは無縁でしたが、中国では清王朝しんの終わりの二十世紀初めまで存在し、中国の歴史上その弊害へいがいは大きく、特に後漢こう、唐とう、明みんの時代は最もはなはだしかったといわれます。

質帝しつていの次の皇帝である桓帝かんていは、この宦官の協力を得て、権勢をふるった外戚がいせきの梁冀りやうきとそ
の一族を殺します。

しかし、桓帝がみずから政治を始めようになると、今度は宦官たちが外戚にかわって政

治を牛耳ぎゆうじるようになります。なかなかうまくいかないものです。桓帝の時に権勢を誇った宦官には、曹操の祖父の曹騰そうとうもいました。そして、その状態は桓帝の次の霊帝れいていにひきつがれます。

このような後漢末の政治状況のなかで、『三国志演義』の舞台が幕開けします。

前置きが長くなりましたが、それでは「三国志演義名場面」のはじまりです。どうぞお楽しみください。